The Japan Society of Educational Sociology

高卒10年・客観的なキャリアと主観的なキャリアの架橋
——東京大学社会科学研究所高卒パネル（JLPS-H）のインタビューデータをもとに

長尾由希子（聖カタリナ大学）

1．はじめに

日本で最初にキャリア教育という言葉が公的に登場したのは、平成11年12月の中教審答申である。文部科学省（2012など）は、平成23年1月の中教審答申などを引きながら、これまでのキャリア教育および周辺概念に関する限界や概念の変遷などに率直に言及している。また、改めて「キャリア教育」とは「一人一人の社会的・職業的自立に向け、必要な基盤となる能力や態度を育てることを通して、キャリア発達を促す教育」で、「キャリア」を職業生活に限定せず、「自分らしい生き方を実現していく過程」であるとしている。

しかし、実際にはこのようなキャリアのとらえ方やキャリア教育の在り方は広まっていない。

こんにちではいずれの学校段階においても、キャリア教育が重視されている。そこでは能力や適性、関心など多様な観点から自分を見つめ、また自分史を掘り下げて理解し、自身の来し方行く末について考察することが求められている。ベースとしては心理学の知見が多く活用されている。例えばキャリア・アンカーとは、職業を選ぶ上で自分が譲れない、錨のように不動の、軸となる価値観を指す。大まかに言えば、これら様々な概念を援用することで「自己」の詳細な理解を目指し、それを軸に職業を選択することが目指されている。

社会学における知見も、学校の手段的利用というかたちで浸透している。学歴差による格差拡大などは社会学が一般的なトピックにまで広めた。学歴にとどまらずさらに合理性を求める発想は強まり、こんにちのキャリア教育においては、「自分の就きたい職業のため、それと関連のある資格等を取得できる学科・専攻の学校に進学する」という考え方が大前提となっている。かつてこのような発想は、専門学校進学者や一部の専門職志望者に限られていたが、現在では児童生徒や家庭、学校現場を広く覆う標準的な発想となっている。

しかし、現実に学科と関連するような職種に就く者は多数派ではない（数値略）。就職先企業についても平成27年度の大卒新入社員で第一志望に入社した者は53.0パーセントである（公益財団法人日本生産性本部・一般社団法人日本経済青年協議会「職業のあり方研究会」「働くことの意識調査」http://activity.jpc-net.jp/detail/lrw/activity001445.html）。

また、仮に初職が能力や関心、学科と密接に結びついた職業であったとしても、一生涯を通じてそのような職業選択をし続けることは可能なのであろうか。難しいと言わざるを得ないであろう。

揺るぎない基準や「本当の自分」を追求するというようなキャリア観は、かえって当事者を追い詰めたり、当事者の解釈や就労実態から大きく外れたりしているのではないだろうか。

本報告では、従来の観点では必ずしも順調ではなくwindingと解釈されやすい数ケースのインタビューデータをもとに、学校での学びと職業・就職先選択に関して当事者がどのような説明を行うのかに注目する。それを通し、（1）理論上は等価ではない事項が個人内では同列に扱われること、（2）ある時点では選択されなかった要素が後に選択の基準になり得ることを指摘し、個人の中における連続性の感覚を、キャリアに関するとらえ方の枠組みとして提起したい。

2．分析に用いるデータ

本報告では、東京大学社会科学研究所高卒パネル（JLPS-H）のインタビュー調査データを用いる。JLPS-Hは、2004年3月に高校を卒業した若者を10年以上追跡し、ほぼ毎年の定量的調査と数度のインタビュー調査を行っている、混合調査法によるパネル調査プロジェクトである。一部の同一協力者には、複数回のインタビューを行っている。

対象地域は、首都圏のある県を含む全国の4県である（進学率と無業率の2つの基準で抽出）。回答者は大卒者が多いとはいえ、首都圏以外を含み、給与水準その他など、地方の現状をよく反映して

NII-Electronic Library Service

いる。また、2004年3月の高卒者は、概ねキャリア教育が提唱され始めた頃に高校生活を送っている。調査協力者がどのようなキャリア教育、進路指導を受けたかは量的調査においてしかたずねていないが、世代的には冒頭で指摘したような価値観の広がりつつある中で育ったと言えるであろう。

3．分析方法および内容

佐藤（2008）は質的なデータの分析において、当事者の意味世界を研究者が研究者コミュニティの意味世界に変換する際の失敗例（「薄い記述」）として、ご都合主義的引用型、要因関連図型、読書感想文型、自己主張型などを挙げ批判している。

JLPS-H のインタビュー調査は、「分厚い記述」を意図した質的調査ではない。本報告では、当事者の説明に登場する学校・職業・就職先決定に関わる要素を拾い、そこに共通する構造に注目する。目新しい分析手法は用いず、佐藤（前掲）の批判する型になるかもしれないが、それにより明らかになることがらもあると思われる。たとえば、量的調査では質問項目化されていないものの当事者にとっては意味のある要素や、データと当事者の意味世界との差などを検討することができる。

4．まとめと課題

本報告では、学校・職業・就職先選択を含むキャリアのとらえ方を、多様な node や引き出しの数を増やしながら、どこかに緩やかな引っ掛かりを見つけていくこととして提起したい（図）。このようなとらえ方には、次の2点の意義がある。

（1）キャリアの考え方について、当事者の手に意味を回復することができる。負け組など格差をめぐり流行った表現は他者の目による評価である。結果、リスクへの警鐘の意味合いより、当事者を苛み、生き方の価値を剥奪する側面があった。主観的な連続性や関連性の感覚を強調することにより、主体的に歩み、コントロールしている感覚をもつことができる。それは、移行の在り方や職業生活の展開が自明性を失う時代によすがとなり得る感覚であるし、客観的には失敗と解釈されやすい事態（第一希望の未達成など）が発生した際、立ち直りや打開策の模索にもつながり得る。

（2）上記は、単にナラティブな解釈の重要性を提案しているわけではない。現行のキャリア教育における枠組みを再検討する必要性を示唆する。

ここで提起していることは、一見ごくあたりまえに思えるかもしれない。冒頭で挙げた「キャリア」の定義にもなじみがよいように思われる。だが、実は既存の概念や枠組みにはない見方である。ごく平凡な見方が忘れられるほど、教育・研究現場は性急でしかも実態にそぐわない「合理的」な説明枠組みに追い立てられているように思われる。

以上の分析は、あくまで枠組みの提案であり、ただちに一般化することはできない。なお、詳しい分析内容や考察、その他の参考・引用文献一覧などは、当日の報告および配布資料において示す。

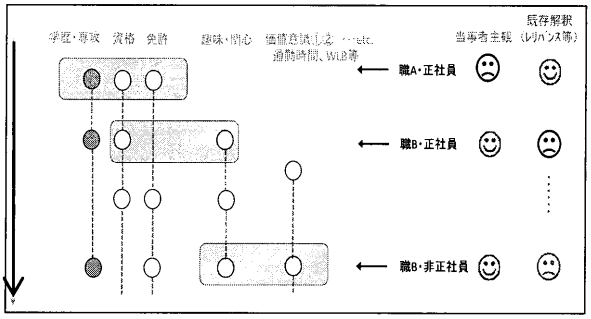

図　キャリアのとらえ方

（キャリア・ノード / キャリア・チェーン / キャリア・モビール）

参考・引用文献

荒川葉（2009）『「夢追い」型進路形成の功罪』東信堂。
稲泉連（2013）『仕事漂流』文藝春秋。
牧野智和（2012）『自己啓発の時代』勁草書房。
文部科学省（2011）『小学校キャリア教育の手引き』、『中学校キャリア教育の手引き』、（2012）『高等学校キャリア教育の手引き』教育出版。
森博嗣（2013）『「やりがいのある仕事」という幻想』朝日新聞出版。
佐藤郁哉（2008）『質的データ分析法』新曜社。

謝辞　本報告は、科学研究費補助金基盤研究（S）（22223005）、基盤研究（C）（25381122）および厚生労働科学研究費補助金政策科学推進事業（H16－政策－018）の助成を受けたものである。東京大学社会科学研究所パネル調査の実施にあたっては、社会科学研究所研究資金、株式会社アウトソーシングからの奨学寄付金を受けた。パネル調査データの使用にあたっては社会科学研究所パネル調査企画委員会の許可を受けた。

NII-Electronic Library Service